＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第 117 回関西スペイン語教授法ワークショップ(TADESKA) 開催の報告

CXVII Reunión del Taller de Didáctica de Español de Kansai

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

日時：2018 年 5 月 13 日（日） 10:30 - 12:30

場所：立命館大学大阪いばらきキャンパス（OIC） 研究会室 1

担当者：横山友里

『教授法（おしえかた）～新しい挑戦～』

「TBLT (Task-Based Language Teaching)を取り入れた日本におけるスペイン語教育」

* Fecha y hora: domingo, 13 de mayo de 2018, de 10:30 a 12:30

* Lugar: Universidad Ritsumeikan, Campus de Osaka-Ibaraki “OIC”, Kenkyuukai-shitsu 1

* Encargada: Yuri YOKOYAMA

* [Metodología: nuevos desafíos]

“El Enfoque por tareas aplicado a la enseñanza del español de Japón”

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ワークショップの流れと発表の内容

当日は、第 1 部、TBLT の実践と紹介を行った。具体的には、以下の項目を扱った。

①TBLT の歴史的背景と TBLT を理解するために必要となる第二言語習得理論の理解をワークショップ形式で行った。次に、②教師自身がスペイン語学習を通して学習者にどのような力を身につけて欲しいと願っているのかをグループワークにより意見交換した。当日出た意見をまとめたものを以下にまとめている。続けて、③グループワークにより出てきた教師が願う学習者像と、Long(2015); 松村(2017)による TBLT の目指す学習者像の比較検証を行い、TBLT の方向性を確認した。その後、④TBLT の定義（Ellis＆Shintani, 2014）を確認した後、⑤具体的な TBLT によるスペイン語学習を行い、⑥TBLT の定義にどの部分が当てはまっているかの再確認を行った。最後に、日本で TBLT を導入することによって生じると考えられる問題点を列挙、先行研究で指摘されている問題点とその対処法を共有した。

スペイン語学習を通してどのような力を身につけて欲しいと教師は願っているのか

当日ワークショップにて出た意見を以下にまとめる。ワークは、2 グループに分かれて行われた。手順としては、各参加者がまず付箋にそれぞれ自分の願いを書き出し、それをグループごとに模造紙に貼り、共有した。以下は、当日の模造紙を報告者が書き出したものであ

る。グループ１は内容ごとにグループ分けをして模造紙に貼っていたため、そのグループごとに分けて記載してある。

グループ１

- 言葉を通じて、周りの人との人間関係を構築できるようになること。
- 他者（スペイン語、スペイン語圏の文化・人・社会、クラスメイト・先輩）と繋がる
- 他者（スペイン語、スペイン語圏の文化・人・社会、クラスメイト・先輩）を知る
- 自分以外の言語圏・文化圏のものの見方を身につけてほしい、少なくとも理解する姿勢を身につけてほしい
- 日本語話者や英語話者以外の存在を意識する
- 日本語・英語以外の言語バリエーションの１つとしてスペイン語を知る、触れる

- 自分の文化、他の文化を理解すること
- 未知の言語と比べることで、母語の客観的特性を知る
- 自己（得意なことと苦手なこと）を知る
- 自己（過去・現在・未来）の自分とつながる

- あわよくば言葉の楽しさを
- 言語を用いたコミュニケーションの楽しさ

- 外国語というものの勉強の仕方を身につけてほしい、さらには、将来を何かを学ぶ時に役立てば
- 嫌いなもの、難しいことへ対応する力
- それまで理解できなかったことが理解できるようになる喜びを知る
- 自分の可能性を伸ばしていけるという経験をしてほしい
- 母語以外で書かれた媒体から情報を得る能力を身につけてほしい

グループ２

- 新たな言語学習を通じて世界の多様性を知り、視野を広げる
- 日本人にとって外国語は英語だけではなく、他の言語もあり世界には様々な人々がいることを意識させたい
- 世界の広さを感じ取り理解する力を育む
- スペイン語圏の文化・社会に興味を持ってもらう
- 世界で起こっていることを自分の目で見て判断する力
- スペイン語の基礎を習得し、英語以外の言語でも外国の生の情報に触れたり調べたり

することができるようになる
- 「ことば」を自覚的・随意的に使えるようになる
- 「あたり前」（言語習慣）を崩すことで新しい観点とポテンシャルを引き出す
- 発想力
- 主体性
- 傾聴
- 豊かな感性
- コミュニケーション能力
- 困った時の対応力、工夫
- ツールをうまく利用してスペイン語でコミュニケーションができるようになる
- 外国語を使う際の恐怖心をとりはらうこと
- ユーモア（楽しんでみる）ゲーム的に etc.
- 自立
- 合理的に何かを処理していく力
- 多文化を受け入れ共存するという考え
- 日本語コミュニケーションを（各自なりに）よりよくする
- 世界の多様な人々とのご縁（良縁）をとりむすぶ
- 瞬発力

議論

当日出た議題は以下の通りである。以下簡単に説明を加える。

- **TBLT の定義は、厳格に守られなければならないのか**
  - TBLT の定義を遵守する必要は、発表者は必ずしもないと考える。TBLT 研究者の中にも、定義を必ず守る派と緩やかな定義を持つ派が存在している。TBLT の基礎となるコンセプトは、**必ず外国語を使ってコミュニケーションを取らないと達成できないタスク**を文法指導の**前**に行うというものであり、これが達成されていれば、ほかの定義も自ずと達成されるものであると言える。
- **自分たちなりに解釈してやってきた TBLT らしいものは、一体何なのか**
  - 上記の点が含まれていれば、自分たちが行ってきたものが必ずしも正しい TBLT である必要はないし、これは TBLT なのかと気にする必要性はないと考える。一番重要なのは、前述の点を踏まえて、学習者にとって機能する外国語（スペイン語）を学ぶという学習者中心の考えであり、必ずしもいつも「正しい TBLT」でなければならない理由はない。
- **TBLT の具体例が知りたい**
  - 今回ワークショップの中で提示した具体例に加えて、より実践的なワークショップ

を開催予定である。

- **初心者にとって難しい内容となるのではないか**
  - スペイン語を全く知らない初心者にも TBLT、タスクを中心とした指導法は可能である。重要なのは、認知活動（比較する、推測するなど）としての真正性を確保することであり、状況としての真正性を全くの初心者の段階で確保すると難しいと言えるであろう。初心者の具体的なタスク例は、ジェーン・ウィリス著、青木昭六監訳（1996）『タスクが開く新しい英語教育－英語教師のための実践ハンドブック－』開隆堂　を参照してほしい。
- **文法はどのように教えるのか**
  - 文法は、タスクを行なった後に指導を行う。タスクを中心とした指導法は、文法を教えないということではなく、学習者が必要としている、また習得の準備ができている文法項目を教えるという発想の指導法である。
- **評価はどうするのか**
  - 評価については、まず、与えられたタスクを達成できたかどうかという点で評価が行われる。より細かい評価基準については、各指導者に委ねられている実態であり、より詳細な研究が待たれる点である。
- **時間がとてもかかるのではないか**
  - TBLT、タスクを中心とした指導法では、学習者が習得できる準備のできた文法項目を学んでいく。この点を考えると、教員側からのみの視点で、知識として文法事項を教える、スペイン語を話せなくても文法問題を解くことができるということを目標とすると、全ての文法項目を習得するには時間がかかるといえる。しかし、学習者側から見て、ある程度の文法項目を習得し、実際にスペイン語の使い手として機能するという目標を達成するためには、時間はかからない、もしくは伝統的な手法よりも時間はかからないと言えるのではないだろうか。
- **日本語の使用はどうするのか**
  - 先行研究では、日本語を使わずにより簡単なスペイン語に置き換えて指導する、日本語を使用してしまった部分を記録しておくオブザーバー役を置き、日本語を使用してしまった部分（＝習得していない部分）を後で学習するという手法などが提案されている。

参考文献

Ellis, R. (2018). Towards a modular language curriculum for using tasks. Language Teaching Research, 1-22.

Ellis, R., & Shintani, N. (2014). Exploring language pedagogy through second language

acquisition research. London: Routledge.
福田純也「タスク・ベースの言語指導と認知のメカニズムー第二言語の学習を促す心理的要因」２章『タスク・ベースの英語指導ーTBLT の理解と実践』松村昌紀 編著，（東京: 大修館書店, 2017）37-62.
福田純也「タスク・ベースの言語指導と教育思想ー社会における教育としての TBLT」3 章『タスク・ベースの英語指導ーTBLT の理解と実践』松村昌紀 編著，（東京: 大修館書店, 2017）63-83.
松村昌紀「タスク・ベースの発送と言語教育の方法論」1 章『タスク・ベースの英語指導ーTBLT の理解と実践』松村昌紀 編著，（東京: 大修館書店, 2017）63-83.
Robinson. P. (2011). Second language task complexity, the cognition hypothesis, language learning, and performance. In P.Robinson(Ed.), Second language task complexity Researching the cognition hypothesis of language learning and performance(pp.2-38). Amsterdam: Jon Benjamins.
白畑知彦ほか『英語教育用語辞典』，（東京: 大修館書店, 2009）.
Skehan, P. (1998). A cognitive approach to language teaching. Oxford University Press.
田村祐「タスク・ベースの言語指導をめぐる疑問と解決への道」4 章『タスク・ベースの英語指導ーTBLT の理解と実践』松村昌紀 編著，（東京: 大修館書店, 2017）63-83.

この発表は、JSPS 科研費 18K12475 の助成を受けたものです。